【75】

氏　名（本籍）	彭（ほう）　玉全（ぎょくぜん）（中　国）
学位の種類	博　士（言語学）
学位記番号	博　甲　第　5596　号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**現代日本語の時間表現に関わる副詞の研究** －事態存在のありかたを表す副詞と出来事生起のありかたを表す副詞を中心に－

主　査	筑波大学教授	博士（言語学）	矢澤真人
副　査	筑波大学教授	博士（言語学）	大倉　浩
副　査	筑波大学准教授	博士（言語学）	那須昭夫
副　査	筑波大学准教授		橋本　修
副　査	筑波大学准教授	博士（言語学）	小野正樹

論文の内容の要旨

本論文は、日本語の時間表現に関わる副詞が述語動詞とどのような修飾関係を構成するのかについて、多量のデータを元に実態を分析したものである。本論文で扱う、事態の頻度を表す副詞（「いつも」「たびたび」など）や出来事の起こり方を表す副詞（「突然」「まもなく」など）は、従来の研究では、個々の語彙的な意味から分析されることが多く、構文的な機能については検討が十分であるとは言い難かった。

本論文は、これらの副詞相互の語順や時の状況成分との語順、述部のアスペクト・モダリティとの共起など、種々の構文的な現象について実態調査と分析を行い、これらの副詞の機能を明らかにしている。

本論文は、7章からなる。

第1章では、序論として、本論文で扱う事態存在のありかたを表す副詞と出来事生起のありかたを表す副詞について説明するとともに、研究の目的と意義、および本論文の構成を示す。

続く第2章では、これらの副詞についての先行研究を、語彙的意味の研究、機能的研究、個別的研究の3つに分けて紹介し、批判的に検討を加え、従来の研究がこれらの副詞が使われる実態を十分には説明できていないことを指摘する。そして、これらの副詞の機能を考察するためには、アスペクトだけに限らず、「命令・意志・希望・勧誘」などのモダリティ形式との共起にも注目する必要があること、これらの副詞相互の語順や時の状況成分との語順について検討する必要があることを示す。

第3章では、事態存在のありかたを表す副詞について、まず、「事態の時間的存在のありかたを表す副詞」（「いつも」「たびたび」「頻繁に」などの一般的な頻度副詞類）と「事態の超時間的存在のありかたを表す副詞」（「一般的に」「珍しく」など傾向を表す副詞類）とに大きく分かれることを示す。前者は、頻度副詞としてひとくくりに扱われることも多かったが、述部の叙述類型との共起状況や「命令・意志・希望・勧誘」などの文末表現との共起状況からみて、いくつかのグループに分かれることを、コーパス調査やアンケート調査から明らかにする。一方、超時間的存在のありかたを表す副詞は、時間性や主体性を持つ表現や「命令・

意志・希望」などのモダリティ形式とは共起しにくいといった点で、時間的存在のありかたを表す副詞と異なることを示す。

第4章では、出来事生起のありかたを表す副詞について、コーパス調査やアンケート調査を駆使して、述部のアスペクト形式やモダリティ形式との共起状況から、「意図性」「予見性」といった観点から機能の分析を進めるとともに、これらの副詞が4種に下位分類されることを示す。

第5章では、事態存在のありかたを表す副詞、出来事生起のありかたを表す副詞、時の状況成分などがどのような語順で現れるか、コーパス調査とアンケート調査によって検討を進めていく。従来の研究では、時の状況成分は、これらの副詞に先行するといった記述もなされていたが、これが実態調査と必ずしもそぐわないこと、時の状況成分は時間幅と定性で分けて考察する必要があること、出来事生起のありかたを表す副詞には、事態存在のありかたを表す副詞に先行できるものと先行できないものとがあることを示す。

第6章では、副詞が動詞句のアスペクト的意味にどのように寄与するのかについて、動詞の表す出来事構造から、アスペクトの基本的意味および派生的意味と副詞との関わりについて、行為層と変化層の二つの構造から検討し、動詞・名詞句・副詞句などを合わせた総合的な分析が必要であることを示す。

最後に第7章で、本論文の各章の概略を整理して示すとともに、本論文の成果と問題点、今後の課題を示す。

審査の結果の要旨

いわゆる情態修飾関係は、機能的な関係と意味的な関係とを明確に区別することが難しい。このため、従来は、個々の副詞により違いが生じることを承知で大きく構文機能による分類を行う研究と、多少構文的に違うものが混在することは覚悟の上で副詞の語彙的な意味による分類を行う研究とが併行して行われてきた。特に、本論文が扱う副詞類は、「頻度」や「突発性・意外性」といった構文機能なのか語彙的意味なのか判然としない名称で括られることが少なくなかった。

本論文では、過程のありかたを表す副詞や結果副詞などが出来事の内側で修飾を構成するのに対し、頻度や突発性などを表す副詞が出来事の外側で修飾するという共通点があることに注目する。その一方で、頻度を表す副詞類は「事態」の存在のありかたを表すのに対し、突発性などを表す副詞は「出来事」の起こり方を表すと分析し、両者の違いを明確に示している。本論文がこれらの副詞類を体系的に位置付けたことは、大いに注目される。

本論文では、副詞の語彙的意味に配慮しつつも、述語の叙述類型やアスペクト形式、モダリティ形式などとの共起や、語順といった構文的な現象に注目して、「事態存在のありかたを表す副詞」と「出来事生起のありかたを表す副詞」の違いをはっきり示すとともに、それぞれの内部においてもいくつかの下位分類が立てられることを示していく。体系的な位置付けとともに、その内部の差異にも注目し、さらなる体系化を図るという点も本論文の特徴である。つまり、従来の研究で語彙的意味をもとに括られていた副詞について、表現形式との共起や語順を丁寧に調査し、違いがあるかどうかを見るという手法をとるのである。これを多重に重ね合わせることにより、従来見落とされてきた様々な現象が浮かび上がり、おのずと下位分類がなされていくのであり、同時に、構文機能と語彙的意味の問題を対立させずに処理することが可能となっている。

この共起や語順などは、作例による典型例で示されるのではなく、大量のコーパス調査やアンケート調査による実態の分析によって示されている。数千にも及ぶ実例を丁寧に目視して、該当する例かどうかを判定し、集計していくという作業を、テーマごとに、副詞ひとつひとつに行っていき、淡々と集計表を重ね合わせ、実態へと迫っていく。

本論文では、こうした地道な調査の重ね合わせによって、従来見落とされていた現象や、従来の指摘と実

態がずれている現象を多数浮かび上がらせることに成功している。例えば、事態存在のありかたを表す副詞は、「スル」や「シテイル」などの形式とは共起しやすいが、「～ダス」「～ハジメル」「～ツヅケル」などの局面動詞とは共起しにくいのに対し、出来事生起のありかたを表す副詞は、局面動詞と共起しやすく、「シテイル」とは共起しにくいことや、同じ出来事生起のありかたを表す副詞でも、「突然」「急に」などは「～ダス」と共起しやすいのに対し、「早速」「すぐ」などは「～ハジメル」と共起しやすいといった発見がなされている。また、事態存在や出来事生起のありかたを表す副詞にアスペクトやテンスだけでなく、モダリティ形式との共起制限が見られることや、時の状況成分と副詞との語順については、従来も指摘はされていたが、実態はそれとは多少違った様相を示していることが明らかになった。

充実した実態調査に対し、それぞれの現象を統一する理論へのとりまとめは、必ずしも成功しているとは言い難い。調査と集計の丁寧さと比べると、分析に際して注目すべき数値や傾向を見落としているところもいくつか見られる。それぞれの調査から、ある傾向が見いだされたことで満足して、なぜそのような傾向になるのかについての追究がおろそかになったり、他の傾向を見落としたりしているところがある。その中には、論をより強固に支える現象や理論化へ結びつく現象もあるだけに、集計結果をさらに詳細に分析することが望まれる。しかし、このことは、今後の研究の発展の可能性を示すものであって、本論文の価値を損なうものではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。